論文の内容の要旨

論文題目　　ブルガリア語の *l* 分詞の語用論的研究―
いわゆる Evidential のカテゴリーに関連して

氏名　　ヨフコバ四位　エレオノラ

本稿はブルガリア語のいわゆる Evidential のカテゴリーに関わる *l* 分詞を伴う述語の諸形式の意味・機能について論じているものである。本稿の論点となっているのは次の二つの問題点である。一つは、*l* 分詞の性質に見られるテンス・アスペクト・モダリティというカテゴリーの相互関係であり、もう一つは、*l* 分詞の意味ドメインの特定である。

l 分詞に見られるテンス・アスペクト・モダリティの関係という論点を、次の二つの問題に結びつけて論じている。一つは *l* 分詞のカテゴリゼーション（文法範疇上での分類）の問題である。本稿は、*l* 分詞の、従来のような文法範疇へのカテゴリゼーションに従わずに、全ての形式、その機能、そして機能の関連を「主観化」（subjectification）というプロセスの観点から捉えている。*l* 分詞とその機能を「主観化」というプロセスの観点から捉えることによって、従来の見解では説明が不十分だと思われる、非モダリティ的働きとモダリティ的働きの両方を持っている形式（定過去 *l* 分詞と繋辞から構成される形式）の性質およびこのような形式と完全に主観化している *l* 分詞（半過去 *l* 分詞の形式または無繋辞の形式）の関連が十分に説明できる。「主観化」というプロセスの背景には、パーフェクト（定過去 *l* 分詞と繋辞から構成される形式）の decategorization（テンス・アスペクト＞モダリティ）というプロセスが働き、その結果、テンス／アスペクトの

ドメイン（またそのドメインにおいて働く形式）がモダリティドメイン（またそのドメインにおいて働く形式）へと拡大し、モダリティドメインと繋がって一つの連続体をなす。

1 分詞に見られるテンス・アスペクト・モダリティの関係という問題を巡るもう一つの論点は、*1*分詞のテンス・アスペクト的特徴（分詞のタイプ）の、*1*分詞の機能のタイプへの影響を探るということである。*1* 分詞の機能の中、アスペクト（現在完了）またはテンス（不定過去）そしてモダリティ（推量、伝聞、不信、驚異、皮肉、誉め事など）的機能がある。本稿の分析が明らかにしているように、定過去 *1*分詞によって表される機能（現在完了、不定過去、結果状態による推量）は、パーフェクト本来の意味（結果状態、現時関与）を保っている。また、定過去 *1* 分詞は非モダリティとモダリティの両方のドメインにおいて働いている。一方、半過去 *1*分詞は完全に主観化し、その機能が純モーダルである。

本稿のさらなる論点となっているのは、*1* 分詞のあらゆる機能を概括に記述できる共通の意味特徴の特定である。*1* 分詞は様々な機能を持ち、またその機能の中には、「情報源」または「証拠性」と関係のある機能（推量、伝聞）もあれば、「情報源」または「証拠性」と決めかねる働き（驚異、皮肉、誉め事、不満）もある。従来の研究では、*1*分詞の基本的意味特徴を記述する様々な概念（「非目撃性」、「非知覚性」「伝聞性」、「情報源」、「情報源または情報そのものに関する話者の態度」、「非確言性」）が提案されているが、どれ一つも、*1*分詞の複数の機能と意味の十分な記述には及ばない。本稿では、*1* 分詞の一見関係がないかのように見える異質な働きを関連付けるために新概念を提示し、その概念を「発話時における話者の意識的関与の状態」と定義付けた。「発話時における話者の意識的関与の状態」という概念は、出来事または発言に対する話者の現在（発話時）の意識的関与の状態という意味要素を含んでいると同時に、発話時以前の何らかの意識的状態を想定し、それを現在の意識的状態と対比させるという意味要素まで含意する。本稿で提案するこの概念の意味に含まれている現在的要素（発話時における話者の意識的関与の状態）と過去的要素（発話時以前の話者の意識的関与の状態）は、*1*分詞の原型（prototype）となっているパーフェクトの意味要素と巧く合致し、パーフェクトとの関連、すなわちパーフェクトが Evidential へと拡大した根拠を明確に示している。